

六

花



2

2023

りっかはいくかい

ゆく河

山田 六甲

ゆく河の流れを鴨の流れけり
稿をつぐ右手左手鬼の豆
雪しまく新発田の町に立ち寄れず
転々と家移り来て豆を打つ
午まえひるにあられ跳ね合ふ石畳
外に出て百歩ゆづらず西行忌
其角忌のあすは雪との雲流れ

其角忌の裏は花色もめんかな
恋猫や甘えながらも爪立てて
かの子忌のいのち返せと波の声
不死男忌やうみの名前は誰がつけし
酔ひどれの巖はおぼれ放哉忌
お国忌や大社の巫女とすれ違ひ
声嘎れて湖にくる鳥一羽
康成忌ストーブ列車知らずなる
水占の紙寒々と浮いてをり
海苔を搔く人や冬波背に負へる

膝に来て花束となる春著の子 田尻 りさ

ひざにきしてはなたばとなるはるぎのこ

春着は本来「春著」と書いた。正月に着る晴れ着のことで、孫か幼い子が正月の晴れ着を着てちよこんとおばあちゃんの膝に乗った。これほど嬉しく可愛いことはないかのように膝を貸したおばあちゃん。皺くちやの顔をさらに崩して、おめでとうと花束を貰った時のように喜びが溢れている光景。句の眼目は解説の必要がないほど読者にもこの光景表現は迎え入れられる。俳句とはこのように喜びを皆で共有できる易しい表現であること。覚えやすいこと。それを彼女は成し遂げた。(六甲)

草の露風の音してざらざらり 草場つくし

くさのつゆかぜのおとしてきらきらり

「露」は秋の季語。少し風が出てきて草に宿った露の玉が揺れ始めた。その表現を「きらきらりと」五音でリズムを付けて儚い露を明るく表現。次の瞬間露は風に草を離れて光りながら落ちてゆく様子を読者に想像させる。「露」は光に当たると消えてしまうので、わが身のはかなさをもたえて

いる。(六甲)

風遊ぶ ◎ 笹村 政子

コスモスに紛れて風をあそびけり
 ひと色の丘となしたる秋ざくら
 ゆく雲のわれを残せし花野かな
 山茶花の風のおとなる二三片
 山茶花の白なる夜を散りにけり
 出雲へと雲連なれる神の旅
 東国の雲に雲添ふ神の旅
 大寺を抜け尼寺の酔芙蓉
 大和路の野の色に咲き吾亦紅
 大和路の起伏ゆるやか吾亦紅

栗飯に ◎ 志方 章子

鼻先にほのかな苦みむかご飯
 茹で栗のほろりと温き三時かな
 栗飯に肩を凝らしてしまひけり
 誰もぬぬ故里ならむ木守柿
 旅先の幾度あはむ秋時雨
 苔玉の紅葉してゐる窓辺かな
 どんな人住みてゐるやら蔦紅葉
 焼き栗をほほ張りながら登る城
 七五三しなを作りて歩ける子
 匂ひなんて平氣の平左銀杏の実

コスモスに紛れて風をあそびけり

コスモスにまぎれてかぜをあそびけり
 コスモスの句。コスモスが風に揺られて遊んでい
 るという手帳の表現を逆転して、コスモスに風が遊
 んだというのが詩的な捉え方。実年齢にかかわらず
 詩的発想と年齢による脳の衰えを知らない人たちが
 六花には多い。その代表が政子であろう。何時まで
 も若々しくて羨ましい。「コスモスに風はいけない
 よ」と皆に注意してきたことが念頭にあったのか、
 コスモスに風はいわゆる手帳の句（意外性がない）
 で、使い古された表現であったはずが、いまここに
 挑戦している俳人が存在するのも驚異的。そつ思い
 ませんか皆さん！。

栗飯に肩を凝らしてしまひけり

くりめしにかたをこらしてしまひけり
 主婦の立場を詠んだ作品。食べる方は「栗飯か、
 いいなあ！」と口で言えば済むが、調理をする主婦
 はそうはいかない。栗の皮むき、液薄皮剥きなど下
 処理がされていないと栗飯はなりたたない。そのせ
 いで料理をする方は肩が凝ったというのである。う。
 物には裏に隠れた努力があつて物事が成り立つと教
 えてくれる作品。

「秋時雨」の句旅先で何度も時雨にあつたという。
 その天候の荒れ具合も旅ならば楽しいことよとい
 うのである。

「木守柿」の句は、昔の親兄弟やお手伝いさんなど
 もう若い頃の人々は今は亡くなっている寂しさの象
 徴が柿の木に一個、思い出のように残っている光景。
 七五三の光景。子供でありながら晴れ着の子供が立
 派な女性のようにしなを作つて見えると感心してい
 る。鼻先にほのかな苦みの句、風雅を嗅ぎ取る感覚
 が嬉しい。夢風撰候補。

はまなす抄

火禱 ◎ 升田ヤス子

初鳴や早瀬を迂りまた戻り
霽れの日の衣を脱ぎ桜落葉かな
藤袴庭師が肩に抱へくる
搦手の道にひそやか藤袴
金木犀散るや蒔絵となる花台
火禱のあはきぐい飲み新走り
今年酒胴壺の爛はほどほどに
冬うらら尼寺に干す猫つぐら
新松子絵伝の太子みづら髪
亡き人の夢のつづきの月の蝕

聖五月抄

鰯雲 ◎ 善野 行

落し水しばし逸りて鎮まりぬ
里祭猛る若い衆戻り来し
里祭太鼓の響き腹に良き
妻留守の夜寒の星を数へけり
朧摺りの音や忙しき袋積み
地蔵経為溺死菩提鴨の声
掌に取れば激しくにほふ野菊かな
山国や月夜の底の蕎麦の花
今にして在所なつかし返り花
梢なる柿の夕陽に紛れけり

火禱のあはきぐい飲み新走り

ほだすきのあわきぐいのみあらばしり
火禱とは「辞書」によると「陶器に現れた不規則な緋色の線条。焼成の際、無釉（むゆう）の器面にわらなどが触れて作用し、発色したものの。塩水をしみ込ませたわら縄を巻きつけるなど人工的にも行う。備前焼に多く見られる。」と。備前で買ってきたぐい飲みに新酒を注いで味わおうという。新走り（あらばしり）とは秋に新米で出来た今年の新酒。収穫の喜びを三酒の神器のように扱った手練れの作品。読者を酔わすとはさすがに、という味わい。初鳴の動きを迂るという表現も巧い。搦手は、からめて。城やとりでの裏門。陣地などの後ろ側。で相手の弱点。相手が注意を払っていないところ。いかに藤袴の咲いていそうな場所。

落し水しばし逸りて鎮まりぬ

おとしみずしばしはやりてしづまりぬ
秋の収穫前、田んぼから実った稲のため水を抜く。その稲を刈る前に、田を干すために流し出す水で田んぼの堰（板や土嚢）を外して田の水を抜く（落水）がその刹那を待っていたかのように田水が逸ったように出ていく様子を詠んだ。しばらくは句の言葉通り堰を切ったように流れ出す水がやがて残り少なくなると静まりかえったようになる。その経過を詠んだ。一句の中での見事な擬人化の動と静。「掌に取れば」の句。菊らしい句い方。咲いている時と切り取ったか千切ったかであろう。見た目の想像より激しく匂うのも菊らしい。さすがに「もっての他」の匂い。夢風撰候補。

落葉踏む ◎ 廣畑 育子

陶器市丹波に挿せる黄菊かな
楠の実の境内黒く染むるほど
落葉径子と手をつなぎ若住職
竜山石の赤青黄色落葉踏む
銀杏大樹後ずさりして仰ぎぬる
銀杏降るさはさはさはと寺の庭
赤々と桜紅葉の空は青
立冬や今朝も穏やか播磨灘
冬暁棚引く雲の神々し
冬うらら児より貰ひし紅茶飴

仕舞ひし服 ◎ 永田万年青

秋暑し仕舞ひし服を亦出して
秋の海船の灯りの滑りゆく
形良き落葉拾ひてしばし立つ
秋時雨ビニール傘の法隆寺
みささぎの際に数本帰り花
返り花これからの事思案して
城垣の櫓は白し帰り花
晩秋の燈台の灯の明かるかり
身に入むや船の灯の遠ざかり
にぎやかな岬の風の肌寒し

竜山石の赤青黄色落葉踏む

たつやまいしのあかあおきいろおちばふむ
竜山を「たつやま」と呼ぶ。加古川に移り来るまでは「りゅうざん」とよんでいたが違った。その石山から掘り出された石はしたがって竜山石（たつやまいし）と呼ぶ。天正年間に池田輝政が築城した姫路城にも、竜山石は多量に使用されたという。その後も大名等特権階級に独占されていたが、宝永（年一七七〇年）に解禁されて以来広く一般に利用されるようになり明治から昭和初期にかけて、優れた建築資材として国会議事堂、皇居吹上御苑、帝国ホテルその他のビルディング等に活用されたという。そのやや青みをおびた石に降る色とりどりの落葉を踏み歩く心地よさが伝わってくる。彼女は色を題材に詠んだ珠玉作品が多い。

秋暑し仕舞ひし服を亦出して

あきあつししまいしふくをまただして
季節の変わり目の悩みを詠んだ。もう涼しくなるだろうと夏服を仕舞い、秋服に着替えたら、また暑さがぶり返して、せっかく仕舞った夏服をまた出してこなければいけない面倒くささに辟易している。昔のように更衣も一度では済まない気候の変動に生活は惑わされることが多くなった。当に万年青さんの言う通りである。気候も今年は年末から大雪で東北の人たちは困っている。三災七難（五穀の価が異常に高騰する物価騰貴のことであり、兵革は戦争、疫病は伝染病や流行病などと今は言う。城垣、帰り花、など写生句であるが絵画的で滋味のある句が多い。万年青は今、力を発揮して来だしたところで注目に値する。句としては「形良き落葉」が佳い。万年青さんには会計で大変お世話になった。引き継ぎが終わり次第一献さんが会計を担当する。

ななかまど ◎ 江見 巖

醉芙蓉心変わりといふ言葉

木瓜の実や何言はれても聞かん坊

錦木や山の噴火を治めたる

車椅子木の実の音を拾ひ行く

ハーケンの音の響くやななかまど

弁慶の添ひし義経木の葉髪

母に客また客のあり菊日和

天麩羅の揚がりてくるや薄紅葉

納豆の一人で食べる妻の留守

沢庵の味付けとなる禅の寺

須磨の奥抄

満月 ◎ 草場つくし

鉄道の本を読みぬる文化の日

包丁で指を切りたる冬の夜

幸いにたいしたことなし冬の夜

冬うらら太陽除き全部青

鳴く犬に怒鳴り返して冬の夜

冬の暮心の整理つかぬまま

冬の暮息子の帰り待ちわびる

冬の暮息子帰りてすぐに行く

冬の雨真つすぐ降りて地を濡らす

透明なカーテンとなる冬の雨

ハーケンの音の響くやななかまど

はーけんのおとのひびくやななかまど

ななかまどの紅葉は美しい。名前の由来は料理用のかまどでなく、炭焼き用のかまどで硬質の木のたぬき、じつくりと時間をかけて7回もかまどで蒸し焼きにしないと炭がでなかつたという説で、火の神として火から守れる意味合いもあるようだという。私の印象は大山のナナカマドで、西側の山腹にあるのが綺麗で赤い帯が山頂へ空へ駆け上がったて行く火のような美しさがある。掲句のハーケンはクライミングの時、岩壁の割れ目に打ち込む金属製のくさびのこととその音の響きによって赤色が際立つのである。菊日和の句もしみじみとして味わいのある作品。

満月や友の介護の終了日

まんげつやとものかいごのしゅうりょうび

満月の句、友達の介護の終了日とは、もしかしたら……と不安がふくらむ。友達が元気になったのか亡くなったのか分からないが、その安堵感が失望感か、どちらでも大きくある満月が、ぽっかり空いた空虚な穴に見えるのか、明るい見通しの光に見えるのか。この句には前書きがあってもいいと思うがいかが。「斑鳩寺」は法隆寺の別称。奈良県生駒郡斑鳩町にある。「若草伽藍」も参照。斑鳩寺（兵庫県太子町）兵庫県揖保郡太子町にある寺院の二か所が有名。その寺の鐘が太子の声のごとく昼に鳴るという風情がいい。草の露の句夢風撰。